児童期までの食事経験がその後の家族関係に及ぼす影響について
―家族イメージ法を用いて―

内 田 優 也

The influence that the experience of meal to a school-age children gives to the later family relationships
―Using family image technique―

Yuya UCHIDA

【要 旨】本研究は、大学生の児童期までの食事経験が現在の家族関係にどのような影響を及ぼすのかを検討する目的で行われた。食事経験に関する項目として「大学生が認知した過去の食事場面の状況に関する項目」、現在の家族関係に関する尺度として「家族機能測定尺度」、「家族イメージ法」を用いて、大学生199名を対象に実施した。「大学生の認知した過去の食事場面の項目」を因子分析した結果、「料理への配慮」、「料理の簡便性」、「相互交流」、「雰囲気のよさ」、「しつけ・マナー」の5因子が抽出された。また、家族機能測定尺度の因子分析の結果、「凝集性」、「適応性」の2因子が抽出された。重回帰分析の結果、「凝集性」、「適応性」にはともに「雰囲気のよさ」、「相互交流」において有意差がみられた。また、「子の濃さ」、「母子の結びつきの強さ」、「父子の結びつきの強さ」は「雰囲気のよさ」に有意差がみられた。先行研究の報告と同様に、過去の家族との食事の「雰囲気のよさ」は改めて重要であることが確認された。食事場面では、単なる会話だけをする場ではなく雰囲気を楽しむことが大切である。しかし、この雰囲気のよさは一体何に規定されるのかは明らかにすることが今後の課題として挙げられた。

問 題

国民生活白書（2007）によると、家族は団欒の場であり、休息や安らぎを求める者が最も多いと示しているが、現状では、働き盛りの30代の男性の約3割が家族と過ごす時間が十分でないと感じていたり、家族全員が一堂に集まる時間を十分に持てない家族が増えていることを報告している。家族にぬくもりや安らぎを求める者は多いが、現在の核家族においては、それが十分満たされているとはいえないと考えられる。

家族におけるぬくもりは家族内のコミュニケーションと関係があるのではないだろうか。平井・岡本（2003）は、小学5、6年生の児童とその両親に対し、調査を行った結果、親子が話し合う場として、最も認知されていた日常場面は、「食事場面」であることを報告している。国民生活白書（2007）においても、週5日以上家族と一緒に行っていることは会話、団欒、食事の中で、最も食事が多いことを述べている。このように食事が家族内のコミュニケーションの機会となっており、家族におけるぬくもりや家族のつながりをみるには、食事場面をとりあげることが重要と考えられる。

家族との食事は、家族関係と反映されていると報告がなされている（平井・岡本、2003；平井・岡本、2005；今野・佐藤、2003）。例えば、平井・岡本（2005）は、小学5、6年生の児童の描いた食事場面の家族画と親子の心理的結合性の関連を分析したところ、楽しく求心的な食事場面の家族ほど、子どもと父親、母親との心理的結合性が高いと述べている。また、今野・佐藤（2003）は、家族の凝集性、適応性の得点からバランス群、中間群、極端群に分類し、食生活の

あり方との関連を検討している。その結果、バランス群の者は、極端群よりも（食事作りの頻度が多い、家族と一緒に食事を食べる、などの）食行動、食物摂取頻度、食事の満足度が有意に高かった。

近年では、2005年に食育基本法が制定されたことから児童期の食事経験に注目が集まっている。食育基本法では、「食育は子どもの心身の成長および人格の形成に大きな影響を与える」と記載されており、食育による子どもの発達への影響について重要視していることが伺える。そこで、本研究では、推進されている食育に生涯発達的視点に基づく知見を提示できると考えられることから、児童期までの家族との食事経験に着目する。

食事経験に着目した先行研究として、大谷等(2002)、伊東・竹内・鈴木（2007)、平井・岡本（2006）が挙げられる。大谷等（2002）は、大学生の過去の家庭における食生活体験と、現在の親子関係、自己独立性との関連を検討している。その結果、「一人で食事をするのが楽しい」は、「自分が好き」と「両親への尊敬度」を下げる要因であることが示されている。伊東・竹内・鈴木（2007）は、大学生の過去の弁当に対する評価と現在の食事習慣、親子関係との関連を検討した結果、高校時代の弁当の肯定的評価よりも幼少期の評価の方が、現在の親子関係への説明力が高いことが示されている。

大谷等（2002）の研究に対して、平井・岡本（2006）は、「子ども時代の食事場面について、多角的に捉えておらず、具体的なものではない。」と述べている。そこで、川崎（2001）がまとめた食生活の要因である「共食頻度」、「食事場面の雰囲気」に加えて、生野（2001）の主張する食事状況の「生理的」、「社会的」、「情緒的」な面を、家庭における食事場面の諸要因として捉え、平井・岡本（2005）で用いられた質問紙の内容を基に、「大学生の過去の食事場面の諸要因」として定義し、Table 1のような「大学生が認知した家庭における過去の食事場面の諸要因」（料理への配慮、料理の簡便性、相互交流、雰囲気のよさ、しつけ・マナー）の項目が作成されている。

その項目を用いて、平井・岡本（2006）は、大学生とその両親との心理的結合性にどのような影響があるのかを検討した。その結果、父子結合性および母子結合性ともに、大きな説明力を有していた食事場面の要因は、「雰囲気のよさ」であった。また、「雰囲気のよさ」以外に、父子結合性においては、「会話頻度」が関連要因と示唆された一方、母子結合性には、「料理への配慮」や食事を通した「相互交流」が関連要因であることを明らかにしている。

そこで、本研究では、平井・岡本（2006）が作成した「過去の食事場面の状況に関する項目26項目」を用いて過去の食事場面を捉える。平井・岡本（2006）は、「過去の食事場面の状況に関する項目26項目」を料理への配慮、料理の簡便性、相互交流、雰囲気、しつけ・マナーの５因子に分けているが、これらの点数が高ければ高いほど、過去の食事場面が良いという目的のもと作成された尺度ではないため、本研究では、「過去の食事場面の状況に関する項目26項目」を全体として捉えず、それぞれの因子ごとに分けた検討する。

家族システムを評価する尺度

これまで過去の食事場面と親子関係の関連が検討されてきたが（平井・岡本、2006)、家族全体の評価に焦点を当てた研究はない。「食を通じた家族のコミュニケーションの機会の減少は、子どもの健康的な心身を育み、豊かな人格を形成する場としての家族機能が低下していることを意味している」（国民生活白書、2007）とされており、過去の良好な食事経験と、後の

Table 1　大学生が認知した過去の食事場面の下位尺度相関と平均値、*SD*

	料理への配慮	料理の簡便性	相互交流	雰囲気のよさ	しつけ・マナー	平均	*SD*
料理への配慮	—	-.32***	.33***	.44***	.24**	5.04	0.85
料理の簡便性		—	-.11	-.27***	-.11	1.86	0.46
相互交流			—	.47***	.34***	4.44	1.19
雰囲気のよさ					.28***	5.40	1.27
しつけ・マナー					—	4.73	1.29

*p<.05、**p<.01、***p,.001

親子関係の関連だけでなく、家族全体のシステムに着目した検討をしていく必要性がある。

家族システムを評価する主な尺度として、草田・岡堂（1993）が、Olson, McCabbin, Larsen, Muxen & Wilson（1985）のFACESⅢを和訳して作成した「家族機能測定尺度」（Table 2）と、視覚的に家族関係を把握することができる家族イメージ法（亀口、2003）がある。

家族機能測定尺度は、理想と現実の家族機能を測定する尺度である。なんらかの問題を抱える家族を治療しようと試みても、家族関係を家族以外の者が外部から客観的に捉えることが難しいことから、Olsonの円環モデルが1980年頃から使用されてきた。円環モデルは、凝集性、適応性、コミュニケーションの３つの次元から構成される。凝集性、適応性ともに、極端なレベル（非常に高い、あるいは非常に低いレベル）は、家族機能がうまく働かず、中間のレベルでは、家族機能がよく働くという仮説が立てられているが、ここ数年その円環モデルに対する批判的検討がなされているは指摘している（西出・夏野、1997）。その中で、凝集性と家族との健康度との間に正の相関関係を見出している結果も見られる（西出・夏野、1997）。円環モデルでは、凝集性、適応性ともに高いと否定的な評価がなされるが、わが国ではそれとは異なり、凝集性が高いことは肯定的に評価されることが多い（例えば、西出、1993a）。

次に、家族イメージ法とは、秋丸・亀口（1988）によって開発された家族査定法である。これは、家族が自分たち家族にどのような視覚的イメージを抱いているかについて、白から黒の５段階に色分けされている直径1.6cmの円形シールを個々の家族に見立て、用紙上の15cm×15cmの枠内に配置させる動作法を用いた自己査定法である（亀口、2003）。

配置したシールの下に家族メンバーの名前を記入し、シールの色の濃さで家族メンバーの強さ（元気のよさ・発言力の強さなど）を表現し、「>」印で家族メンバーの向いている方向が表現できるようになっている。また、家族メンバー同士の結びつきを表現するために、シールの間の線を引くよう求める。その際、家族メンバー同士の結びつきが強い場合には太い線で線を引き、結びつきが普通の場合には実線、結びつきがわからない場合には点線を引くように求める。

柴崎・丹野・亀口（2001）は、父、母、大学生（以下、子と表記）の①シールの濃さ、②結びつきの強さ、③シールの向き、④シール間の距離、⑤シールの高さの５つの指標を挙げ、分析している。前出・島谷（2004）は、これらの指標を使用して、家族関係尺度（肯定的家族観尺度、父子関係尺度、母子関係尺度、両親関係尺度）との関連を検討しているが、④シール間の距離については、指標の捉え方に問題があること、⑤シールの高さについては、指標の分析方法に問題があることが指摘されている。

①シールの濃さは、黒色に近づくほどパワーが強く、白色に近づけるほどパワーが弱いイメージされていることを意味する。②シールの結びつきの強さは、線は各二者間の結びつき（絆）の強度を表すものである（亀口、2003）。

Table 2　家族機能測定尺度の下位尺度相関と平均値、*SD*

	凝集性	適応性	平均	*SD*
凝集性	−	.74***	2.92	0.67
適応性		−	2.98	0.68

*p<.05、**p<.01、***p,.001

本研究の目的

本研究では家族との「食事場面」をとりあげ、家庭における過去の食事のあり方と青年期のあり方に着目して検討を行う。すなわち、過去の食事場面の諸要因が、現在の家族機能・家族イメージにどのように影響しているのかを検討することを目的とする。

過去の家族との食事場面の諸要因と、現在の家族機能との関係について、直線的な相関関係を想定して検討する。なお、家族機能測定尺度の下位尺度である凝集性、適応性の定義についてはTable 2に示す。

また、本研究においては家族イメージ法の③シールの向き、④シール間の距離、⑤シールの高さの指標の捉え方が曖昧であったため、これらを量的分析の対象から外すこととした。

方　法

１．調査の概要、調査計画及び被験者

(1)　調査対象者

調査対象者は、X県内の私立大学の男性28名と女性171名の大学生199名（18～22歳、平均年齢19.6歳）を分析に使用した。

2．調査の内容

(1) 大学生の認知した過去の家庭の食事場面

平井・岡本（2006）が作成した「大学生が認知した過去の食事場面の状況に関する項目」を使用した。料理への配慮尺度８項目、料理の簡便性尺度４項目、相互交流尺度４項目、雰囲気の良さ尺度２項目、しつけ・マナー尺度３項目の下位尺度で計21項目がある。回答形式は７段階評定（７点：非常に当てはまる～１点：全く当てはまらない）であった。

(2) 家族機能測定尺度

家族機能測定尺度の質問紙は、凝集性尺度10項目、適応性尺度10項目の下位尺度から構成されている。回答形式は５件法で求め、家族機能が高いほど高得点になるように、各項目への回答に対して１～５点を与えた。なお、質問項目は草田（1995）が指定したとおりに配置した。

(3) 家族イメージ法

秋丸・亀口（1988）によって開発された家族イメージ法を用いる。Ｂ４版で、左半ページに実施要領が記載されており、調査対象者が実際に家族イメージを投影するスペースは、右ページである。実施ページには、１辺15cmの正方形の枠が描かれている。この枠内に、直径1.6cmの大きさで、関心の方向を示すための矢印がつけられているシールを貼るようになっている。シールを家族メンバーに見立て、その下に家族メンバーの名前を記入していく。シールは、家族の白色と黒色の間に三段階の濃度の灰色が準備され、計５段階に色分けされている。そして、各シール間には、強度を段階に分けて線を書き込むようになっている。

なお、①シールの濃さは、家族成員の発言力、影響力などのパワーの強さを５段階で示す。最も濃い色（黒）から白の順に５点～１点に得点化した。②シールの結びつきの強さは、家族成員間の結びつきを３段階の線で表す。強い結びつきがある太線から順に３点～１点に得点化した。また、本研究では、子、母親、父親を分析の対象とし、兄弟や姉妹、祖母、祖父、ペットなどは、分析の対象から外した。

結　果

1．各尺度の因子分析

(1) 大学生の認知した過去の家庭の食事場面

大学生が認知した家庭における過去の食事場面の状況に関する項目の回答について、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。抽出因子は５とした。その結果、No.7を除いて、平井・岡本（2006）と同様、第１因子に「料理への配慮」の項目、第２因子に「料理の簡便性」の項目、第３因子に「相互交流」の項目、第４因子に「料理への配慮」の項目、第５因子に「しつけ・マナー」の項目がそれぞれ高い因子負荷量を示した。そこで、.30より因子負荷量が低かったNo.7を除いて再度、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行ったところ、それぞれ高い因子負荷量が示された。

第１因子の７項目を「料理への配慮尺度」、第２因子の４項目を「料理の簡便性尺度」、第３因子の４項目を「相互交流尺度」、第４因子の３項目を「しつけ・マナー尺度」、第５因子の２項目を「雰囲気のよさ尺度」とみなした。

(2) 大学生の認知した過去の家庭の食事場面の下位尺度間の相関

大学生の認知した過去の食事場面の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点

Table 3　諸項目の相関関係

	料理への配慮	料理の簡便性	相互交流	雰囲気のよさ	しつけ・マナー
凝集性	.23**	-.18*	.43***	.54***	.20**
適応性	.11	-.15*	.35***	.47***	.18*
子濃さ	.13	-.06	.06	.27***	.09
母濃さ	.06	.08	.04	-.04	.04
父濃さ	-.01	.02	.09	.02	.03
母子結び	.10	-.09	.09	.34***	-.03
父子結び	.12	-.12	.15	.27***	.16*
両親結び	-.01	.01	.00	.14	.03

*p<.05、**p<.01、***p,.001

を、各下位尺度得点とした。Table 1に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を示す。尺度の信頼性を検討するために、Cronbackのα係数を求めたところ、第1因子はα＝.89、第2因子はα＝.87、第3因子はα＝.68、第4因子はα＝.70、第5因子はα＝.73、尺度全体はα＝.79であった。信頼性は十分に高いと判断された。

(3) 家族機能測定尺度の因子分析

家族機能測定尺度の項目の回答について、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その際、草田（1995）と同様に抽出因子は2とした。その結果、.30より値が低かった項目No.4を除いて、草田（1995）と同様、第1因子に「凝集性」の項目、第2因子に「適応性」の項目がそれぞれ高い因子負荷量が示された。そこで、.30より因子負荷量が低かったNo.4を除いて再度、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。

第1因子において高い負荷量.30以上をもつ11項目を凝集性尺度、第2因子において高い負荷量.30以上をもつ9項目を適応性尺度とみなした。

(4) 家族機能測定尺度の下位尺度間の相関

家族機能測定尺度の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を、各下位尺度得点とした。Table 2に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を示す。尺度の信頼性を検討するためにCronbackのα係数を求めたところ、第1因子はα＝.89、第2因子はα＝.79、尺度全体はα＝.91であり、十分に高い値が示された。家族機能測定尺度の下位尺度相関をTable 2に示す。「凝集性」と「適応性」の下位尺度は有意な相関を示した。

Table 4　家族機能を基準変数とした重回帰分析

	凝集性	適応性
	β	β
料理への配慮	-.06	-.06
料理の簡便性	-.05	-.06
相互交流	.24**	.18*
雰囲気のよさ	.44***	.43***
しつけ・マナー	.01	.03
R^2	.34***	.26***

*p<.05、**p<.01、***p<.001
β：標準偏回帰係数

2．現在の家族機能・イメージに関連する過去の食事場面の諸要因の検討

まず、基準変数および説明変数の各変数間においてピアソンの相関係数を算出した（Table 3）。次に、家族機能（凝集性、適応性）、過去の食事場面の諸要因（料理への配慮、料理の簡便性、相互交流、雰囲気のよさ、しつけ・マナー）の関連を検討するために、凝集性、適応性を基準変数とし、食事場面の諸要因を説明変数とした重回帰分析を行った（Table 4）。その結果、「凝集性」には、「雰囲気のよさ」、「相互交流」において有意差がみられた。「適応性」には、「雰囲気のよさ」、「相互交流」において有意差がみられた。

さらに、家族イメージ（子・母親・父親のシールの濃さ、母子・父子・両親の結びつきの強さ）を基準変数、過去の食事場面の諸要因を説明変数とした重回帰分析を行った（Table 5）。その結果、「子の濃さ」、「母子の結びつきの強さ」、「父子の結びつきの強さ」における「雰囲気のよさ」に有意差がみられた。

Table 5　家族イメージを基準変数とした重回帰分析

	子の濃さ	母親の濃さ	父親の濃さ	母子結び	父子結び	両親結び
	β	β	β	β	β	β
料理への配慮	.03	—	—	-.04	-.03	—
料理の簡便性	.06	—	—	-.01	-.05	—
相互交流	-.08	—	—	-.06	.00	—
雰囲気のよさ	.23***	—	—	.41***	.24**	—
しつけ・マナー	.03	—	—	-.11	.10	—
R^2	.08**	.02	.01	.14***	.08*	.03

*p<.05、**p<.01、***p<.001
β：標準偏回帰係数

考　察

過去の食事場面の諸要因の中でも、特に雰囲気のよさと相互交流が、現在の家族の凝集性、適応性に大きな説明力を有していることが、重回帰分析を行ったところ分かった。これまで、雰囲気のよさと親子関係の関連を示唆されてきたが（例えば、平井・岡本、2006；平井・岡本、2005）、本研究でも類似した結果となった。以上から、中学生以前に体験した大学生の過去の食事場面における雰囲気のよさは、後の親子関係の良好さとの関連だけではなく、家族のつながりとの関連が示唆される結果となった。

過去の食事場面の一要因である雰囲気のよさは、現在の家族機能、家族イメージに影響を与えていることが示された。家族関係や親子関係には共食する頻度よりもむしろ会話の頻度が重要であることが指摘されてきた（岸田・上村、1993；黒川・小西、1997）が、平井・岡本（2003）は、共食が子どもの発達にとって重要であるが、「共食の頻度だけではなく、食事場面のあり方が重要」と述べている。笹野（2005）は、「家族そろった食事は、日々の儀式の中心的なものであり、うまくいけば、せわしない一日のオアシスであり、家族が集まって、くつろぎ、話し合い、議論し、互いに助け合い、いっしょに笑う時間になりうる」と述べているように、食事場面では家族と単に会話をするのではなく、その場の雰囲気を楽しむことが大切だと思われる。これまで、食事場面の雰囲気が重要であると示唆されてきたが、雰囲気のよさは何に規定されるのかが明らかにされていない。本研究においても、明らかにすることはできなかったが、雰囲気のよさには、共食頻度、料理への配慮、相互交流、しつけ・マナーなど様々な要因が関連し合いながら雰囲気のよさが生みだれているのかもしれない。雰囲気が何に規定されるのか明らかにすることは、今後検討する必要がある。

今後の課題

本研究では、過去の食事場面と家族機能、家族イメージとの関連という家族全体を視野に置いた検討をしたが、家族システムが、食事場面の雰囲気にどのように反映されるのか具体的に検討されていない。家族イメージ法から得られたデータを量的結果と質的分析を照合させることで、家族システムと食事場面の関連が具体的に明らかになるかもしれない。

本研究では家族機能を測る尺度として、家族機能測定尺度を用いた。しかし、この尺度はOlsonの円環モデルと基となっており、本研究では直線的な相関関係を想定したため円環モデルを見ない形となってしまった。家族機能を測る尺度として西出（1993a）のFAI（Family Assessment Inventory）などがあるため他の尺度を選定する必要性があった。

また、本研究では性差の影響を検討していない。調査対象者の半数以上が女性であったため、男性、女性に分けて分析することができなかった。例えば、女子青年にとって父親の存在感が薄いこと（岡本・上地、1999）や依存対象として母親に期待する傾向がある（小野寺、1984）などの知見を踏まえると、この点は重要ではないかと思われる。

引用文献

秋丸貴子・亀口憲治（1988）．家族イメージ法による家族関係認知に関する研究　家族心理学研究、15(2)、61-74.

平井滋野・岡本祐子(2003)．食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連　青年心理学研究、15、33-49.

平井滋野・岡本祐子（2005）．食事場面の家族画から見た子どもの心理的特徴―小学生、高校生の親との心理的結合性の視点から　家族心理学研究、19(2)、77-90.

平井滋野・岡本祐子（2005）．小学生の父親および母親との心理的結合性と家庭における食事場面の諸要因との関連　日本家政学会誌、56(4)、273-282.

平井滋野・岡本祐子（2006）．家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連　日本家政学会誌、Vol.57、No.2、71-79.

生野照子（2001）．「食」と心の動き　食の科学、277、22-82.

今野暁子・佐藤玲子（2006）．高校生における家族関係と食生活との関連　尚絅学院大学紀要、52、123-129.

伊藤暁子・竹内美香・鈴木晶夫(2007)．幼少期の食事経験が青年期の食習慣および親子関係に及ぼす影響　健康心理学研究、Vol.20、No.1、21-31.

亀口憲治(監)(2003)．FIT(家族イメージ法)マニュアル　システムパブリカ.

川崎末美（2001）．食事の質、共食頻度、および食卓の雰囲気が中学生の心の健康に及ぼす影響　日本家政学会誌、52(10)、923-935.

岸田典子・上村芳枝（1993）．学童の食事中における会話の有無と健康および食生活との関連　栄養誌、

51、23-50.
国民生活白書(2007). つながりが築く豊かな国民生活. http://www5.cao.go.jp/seikatsu/index.html
黒川衣代・小西史子（1997）. 食事シーンから見た家族の凝集性―中学生を対象として― 家族関係学、16、51-63.
草田寿子（1995）. 日本語版FACES-Ⅲの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究 28(2)、24-32.
草田寿子・岡堂哲雄（1993）、家族関係査定法 岡堂哲雄(編) 心理検査学 垣内出版、573-581.
前出朋美・島谷まき子（2004）. 家族イメージ法の分析指標の検討―肯定的家族観・父子関係・母子関係・両親関係との関連― 学苑・人間社会学紀要、761、40-47.
西出隆紀・夏野良司（1997）. 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究、45(4)、456-463.
西出隆紀（1993a）. 家族アセスメントインベントリーの作成―家族システム機能の測定 家族心理学研究、7、53-65.
西村美津子・須見登志子（2005）. 幼稚園児の給食に対する食欲への影響要因についてⅡ―父親の養育行動との関連― 山陽学園大学紀要、36、11-21.
岡田みゆき（1998）. 食事中の会話の教育的意義―父子の会話の歴史的変遷― 日本家庭教育学会誌、41、9-16.
小此木圭吾（2000）.「ケータイ・ネット人間」の精神分析―少年も大人も引きこもりの時代― 飛鳥新社.
笹野洋子（2005）. 家族の時間―子どもを伸ばすやさしい暮らし 講談社.
柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治（2001）. 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究、第15巻、第2号、141-148.